

令和5年度第1回新宿区立漱石山房記念館運営学術委員会 議事概要

日 時：令和5年12月12日(火) 14時から16時

会 場：新宿区立漱石山房記念館 地下1階 講座室

出席委員：半田昌之会長、中村廣子副会長、大木志門委員、佐藤裕子委員、松下浩幸委員、山岸吉弘委員、山口進委員、吉川友子委員、波多江誠委員、松澤亮委員、守谷賢一委員、鯨井庸司委員、北見恭一委員（13名）

欠席委員：大木真徳委員、鈴木達也委員（2名）

事務局：村上喜孝(文化観光課長)、北村こころ(文化資源係長)、久米美弥子(文化観光課学芸員)

財 団：岡崎保(文化・芸術振興部長)、今野慶信(漱石山房記念館学芸員)

1 議 題

(1) 委嘱状交付

- ① 第4期新宿区立漱石山房記念館運営学術委員 委嘱状交付
- ② 新宿区あいさつ
- ③ 委員紹介
- ④ 事務局紹介
- ⑤ 会長・副会長の選任

新宿区立漱石山房記念館運営学術委員会設置要綱第3条第4項の規定により委員の互選により会長を選出、会長の指名により副会長を選出した。

会 長 半田昌之委員

副会長 中村廣子委員

- ⑥ 会長・副会長あいさつ

(2) 議 事

- ① 令和4年度の記念館事業等の実績
- ② 令和5年度上半期の記念館事業等の実績
- ③ 令和6年度の事業予定
- ④ その他

2 議事概要

■前回委員会での質問に対する回答について

(1) 夏休み期間等における若年層が興味を持てる展示や事業の開催について

回答：このことは記念館でも認識しているが、一方で漱石作品が本格的な小説が中心で若年層向けのアピールが難しいとも感じている。イベントなどを通じて若年層に訴えかけるような工夫もしているし、新宿区夏目漱石コンクールも重要だと思う。記念館では小学生を対象に夏休みの読書感想文の書き方についてワークショップを行った。また、5年の夏休み期間には『硝子戸の中』をテーマとした展示会を開催し、作品の中身のみならず、漱石が見た東京・新宿というような切り口で展示をした。博物館的な展示ではあったが、小中学生も多く来館し成果を感じた。今後とも各委員からご意見やご提案をいただき、研究したい。

- ・再現書齋は、写真撮影はできるが中には入れない。やはり書齋の中に座って写真を撮りたい、漱石と同じ格好で写真を撮りたい人は多いと思う。子どもたちを入れて写真を撮るのは難しいのか。写真撮ると「ここで漱石の恰好をして撮った」といろいろ拡散するので。小学生くらいでは、いきなり漱石の作品世界に浸るのは難しいかもしれないが、記念館に来たというきっかけから、将来作品を読むことに繋がってくればよいと思う。漱石は『吾輩は猫である』と『坊っちゃん』がなければここまで国民的作家にならなかったと思うので、この二作品を活用して子どもたちにアピールしては。コーナーを設けたり、イベントを実施するなどしたらよいと思う。
- ・いろんな事業を見せていただき、近所の学校として、本の活用という点など、何か一緒にやっていけると感じた。

(2) 記念館の調査研究計画について

回答：年間計画には明記していないが、将来の展示や事業計画の検討を行っていく中で、日常的に調査研究を行っている。特に「松岡・半藤家資料」については、整理を進めながら調査研究を行っている。そうした成果が事業につながるような流れをつくり、今後も学芸員の知見を深めていきたいと考えている。

- ・調査研究については何らかの形で「見える化」しておくことが大事。こういう資料があって、どのように調査研究し、公開していくのかということをお互にわかるようにしておく必要がある。学芸員の仕事をしっかり「見える化」しておく、その方が学芸員もやりやすくなる。それは区民に対して記念館の一連の業務をしっかりとアピールする意味でも大事だと思う。どのような形で「見える化」するかはお任せしたいが、検討していただけるとよいと思う。

(3) 記念館の資料及び図書の収集方針について

回答：記念館の資料及び図書の収集については、夏目漱石とその家族、常設展示で取り上げている 51 名の門下生・友人に関することを一応の範囲として、収集を行っている。収集の方法は、古書店等からの購入、寄贈によるもので、収蔵資料選定委員会に諮って受け入れをしている。

■令和 4 年度及び 5 年度前半の事業実績について

(1) テーマ展示（通常展）「『硝子戸の中』と漱石のみた東京」について

- ・地域の方や子どもたちもたくさん来てくれたというお話があった。早稲田小の児童がまち探検で記念館を訪れ、学芸員のお話を聞いたり、質問をしたりして、その後展示を見学したが、子どもたちは自分の身近なところだったので、ここの道は昔と一緒のようだとか、昔の写真とかを見て、すごく喜んでいて、難しくてわからないとか、字が読めないとか。子どもたちが見て分かるような、そういう展示を考えてもらえたらと思う。「坊っちゃんカルタ」、「吾輩は猫であるカルタ」などカルタやグッズを作るとか、子どもたちに漱石文学をもう少し身近に感じてもらいたい。子どもたちに漱石を知ってもらおう取組みに期待する。

(2) 講座・講演会等について

- ・文学講座とか九日会は錚々たる講師陣で、受講希望者が全国にいると思う。一部は YouTube で配信もしているが、リアルに参加者はそれとして、その配信で収益をという事は考えていないのか。例えば、当日受講者は 1,000 円いただくが、後日配信を見る方は 500 円とか。そういう形で幅広く視聴してもらおうという考えはないか。
→ 現状、配信で収益をあげる仕組みがない。また映像に使用される資料等の権利の問題もありハードルが高い。
- ・最近は大学の授業でも難しい。新聞の切り抜きでもうるさい条件がある。Zoom とかでもいろいろ課題がある。
- ・記念館でもコロナ期間中に、後日期限つき配信をしていた。参加できなくても、自宅で見ることができるというメリット。支払ってでも見るということには慣れてきている。また、講演の要旨やレジュメを後日見られるような仕組み、有料でもよいと思う。受講できなかった方へのサービスについて検討してもらえたらと思う。
- ・YouTube の配信は、アーカイブ化しているのか。
→ 保存はしているが、やはり権利の問題等もありアーカイブとしては公開していな

い。

- ・二、三のご発言を伺って、やはり4年間のコロナ期間を経て、博物館を取り巻く環境が非常に大きく変わっているということ。そしてこれだけ情報通信技術が高度になってきた社会で、改正博物館法が令和5年4月に施行されたが、国自体がやはり博物館DXという世界を推進していくというのは、基本的な方針として位置づけている。その中で二つの側面があると思うが、とてもアグレッシブな展覧会や企画をやって、その評価というのは実際に施設に足を運んだ入館者数にやはりウエイトがかかっているという感じがするが、実はステークホルダーというのはすごく広い範囲に存在しているので、その幅広いステークホルダーに、どのように記念館の情報を提供していくのかという取組みがこれからすごく大事になってくると思う。その時にやはりDXにおける、情報、資料のデジタル化とアーカイブ化、それを公開していくというのは、館の中に実物資料を収集して蓄えていくという「モノの収蔵」と、それを活用していく手段としてのデジタル化というのが車の両輪だと思うので、その車の両輪を育てていくという館の中長期的方針というものは、やはり見据えていくべきだと感じた。

一方、著作物を利用者目線できちんと使えるようにしていくという動きは、最近文化庁の著作権課が中心になって資料の公衆送信サービスが行われるようになっているが、それができる教育施設というのは、図書館と法律上登録されている博物館、博物館相当施設、今回の改正で指定施設という名称になったが、以上が対象となる。従来からあった日本の博物館いわゆる博物館類似施設というのは、著作権法上の権利者制限を前提とした資料の提供というのはできない。だからこの記念館も博物館法上の博物館になって、情報発信において権利者制限ができる形での教育活動とか普及活動ができる基盤を整備していく方向で考えていくのが、あるべき姿かと思う。

博物館経営に関しては現場のマネジメントとオペレーションは大事なところだと思うが、その上位のマネジメントを担っている財団と、設置者である新宿区のガバナンスというのは非常に大事だと思うので、その三者がきちんと対話をして、将来的な記念館のあり方をどうするかというのを議論していくのが不可欠だ。

- ・能の講座をこれまでに何回かやっている。一般向けだとは思いますが、宝生流の講師となっている。各流派でいろいろな違いがあるので、今後も宝生流なのか気になる。
- ・宝生流の方をお願いしてワークショップを入口としてやるのはすごくよい取り組みだと思うので、イントロダクションとして、主要な流派としては観世や金春があり、宝生もその一つだという前振りがあるだけで、随分違うだろうと思う。

→ 記念館は、謡について専門的に学ぶ施設ではないので漱石との関連、謡を味わうきっかけを提供できればと思う。

■令和6年度の事業予定について

(1) テーマ展示「夏目漱石の参禅」について

- ・やはり『門』が取り上げられているが、『夢十夜』の中にも面白い作品があるし、そういう書き込みもあるので、そのあたりも拾うのがよい。
- ・参禅の企画は面白いと思う。実際に参禅の企画もあるのか。禅というと経験したい方は多いと思う。体験程度でもあると面白い。
- ・円覚寺は禅の道場をもっているなので、体験の可能性はあると思う。鎌倉漱石の會も深く関わっているし、現管長も前管長も漱石に造詣が深く、『漱石辞典』を編集する際にも協力的だった。

■記念館の活動の顕在化と発信

- ・調査研究活動の「見える化」というキーワードはすごい重要だ。なんとなく博物館の活動が展覧会とかイベントは外に発信されていくが、それを支える資料収集や調査研究など学芸員が担っている本当の博物館の屋台骨としての日常業務が外から見えない。
「博物館の人って何をしてるのだろう」と感じている人がとても多い。こういうところを博物館の中から外に向かって発信していくために何をすればよいのか、というのが博物館の喫緊の課題だと業界全体としては捉えている。せっかくよいことをやっている博物館が、その中身がブラックボックス化してしまうと、外の人から中が覗けないという状態。そこに親しみを持ってもらうためには、結局この記念館が持つる漱石に関する資料は、自分たちのものだっていう意識を持っている方がどんどん増えていかないと記念館全体を支えるパワーが強くなってこないだろうと思う。

■地域の中での記念館のあり方

- ・博物館・記念館は、新宿区民のもの、国民一人一人の宝なんだという意識を記念館から発信していけるような事業の仕組みというのが、すごく求められていると思う。たまたま漱石山房記念館は、グローバルとしてのブランド力を持っているし、やはり日本全国に訴求できるブランド力も非常に強い。でもやはりこの地にあるということで地域住民の代表としての委員もおられる、これはすごい大きな意味があり、地域のコミュニティ、あるいはその地域社会から支持される記念館でないと、持続的な発展というのは難しいと思う。
- ・早稲田小校長としては、2年生がまち探検で記念館を訪問したり、5・6年生が暗唱で必ず漱石に触れたりしている。早稲田小は1900年開校なので、当時の子どもたちが通っ

てた時と漱石が漱石山房にいた時が重なっているという話も必ずしている。近隣の自治体では地域学習として渋谷区では渋谷科、品川区では市民科、また西東京市は西東京ふるさと学習というのをはじめるなど、自治体ごとに故郷を大事にする学習というのがはじまっている中で、新宿も学校単位では頑張っているが、やはり20年先、30年先の区民を育てるっていう意味でいうと、義務教育段階の子どもたちに、漱石のふるさと学習のような形で触れる機会があると、子ども達ももっと長い目で漱石に触れて、大人になった時にもう一回振り返るようなことができるのかと思う。

- 地域で支えるということはとても大切だし、地域の子どもたちがこの地に生まれ、育ち、そして羽ばたいていく中で、漱石文学に触れて感じたことを次世代に繋いでいくということを期待している。そこに土地の記憶を住んでいる人たちが大切にして、それをつなげていくこと、やはり子どものうちからそういうものを育てていきたいという思いがあって、新宿区のすべての子どもたちが漱石文学に触れていただければと思っている。まず早稲田の地元からそれを始めていきたい。
- 博物館という機能、施設が社会資本として社会の中で機能していく一番の大きなミッションというのは、やはり未来に対する責任を果たすことだと思っている。そのためには、過去のをきっちり守って、未来に受け継ぐということもそうだが、やはり今を生きている人たちと、未来に生きるべき人たちに対して、どういうふうに情報を残し、発信していければいいかというところで、その人たちの、いわゆる「Well-being」(ウェルビーイング)を考えていくというのが博物館の責務だろうと思っている。それを支えるのは区民であり、国民であり、利用者全体だろうと思うので、その人たちから支持されるような記念館として、中長期的な視点を持ちながら、区の担当者とも対話を深めて事業に取り組んでいっていただきたいと思う。